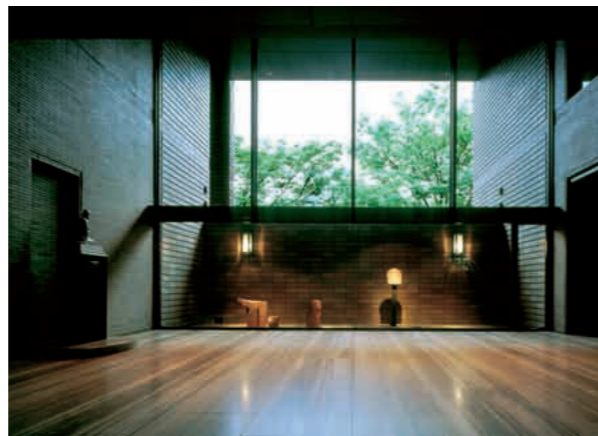




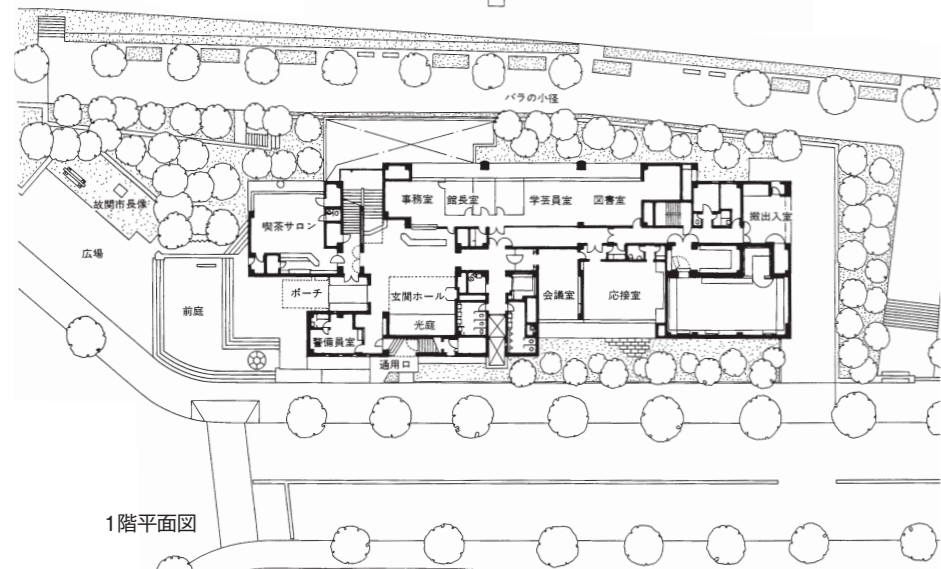
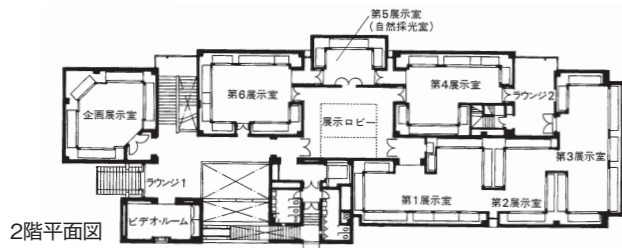
1999年増築直後の全景。土佐堀川(手前)と堂島川(奥)に挟まれて建っている。西側(左手)には中央公会堂や府立図書館など名建築が並ぶ。(※)



玄関ホール。大きな開口部からふりそそぐ光は、「自然のうつろい」に美を感じる日本人のこころを象徴している。(※)

東洋陶磁美術館は水の都・大阪を象徴する中之島の東端に建っている。中之島には、日本銀行大阪支店、大阪市庁舎、府立図書館、中央公会堂など名だたる建築が建ち並ぶ。東洋陶磁美術館は、それらの周辺環境に静かに溶け込み、風格・品格のある建物となっている。建物の高さはヴォリュームを細かく分節して抑えられており、

安宅コレクションを残す
かつて日本の十指に入る総合商社で、ドラマ「ザ・商社」のモデルにもなった安宅産業。大阪市立東洋陶磁美術館は、その安宅産業の会長・安宅英一氏が会社のために選択した世界的にも有名な「安宅コレクション」を収蔵・展示するために設立された美術館である。一九七七年、安宅産業は事実上破綻したが、貴重なコレクションは住友銀行をはじめとする住友グループ二一社によって大阪市に寄贈され、奇跡的に散逸を免れる。コレクションは国宝二点、重要文化財一二点を含む約千点に及んだという。



竣工当時の平面図。展示に一体感を出すために展示室を全て2階とし、ロビーを取り囲むように個々の展示室が配置されている。現在は東側に展示室が増築されている。

外壁には落ち着いた色調の磁器タイルが張られている。外壁のタイルは大型で、微妙に異なる色がラダムに張られ、自然な風合いを演出している。それは竣工後二九年が経過したとは思えないほどの美しさを保っている。

美術品のための美術館
建物の建設にあたり安宅英一氏の右腕としてコレクションの収集を行っていた名誉館長の伊藤郁太郎氏が設計の最初期から加わり、設計者と何度も議論を繰り返した

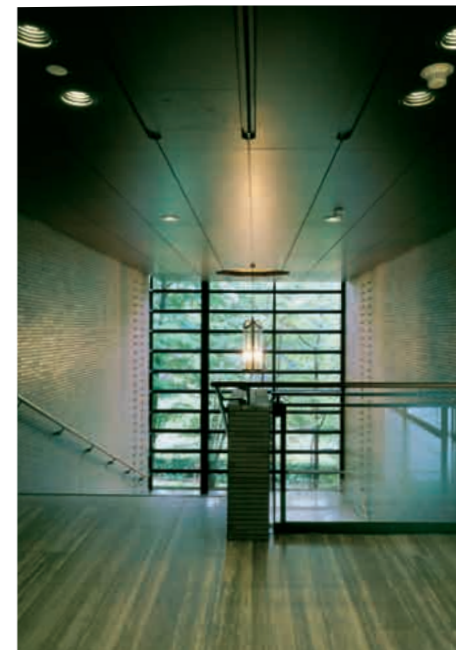
正面玄関。中之島の樹々の中に落ち着いた雰囲気の様子を見せる。建物の細部には陶磁器の美しい模様がモチーフとして多く使われている。(※)



第二五回受賞作品 (一九八四年)
大阪市立東洋陶磁美術館
水の都・大阪。その象徴的な場所「中之島」の東端に建つ大阪市立東洋陶磁美術館は、世界唯一の「自然採光展示ケース」をもつ陶磁器専門の美術館である。その姿は周辺環境に静かに融合し、品格ある佇まいをもっている。

計画概要

所在地：大阪府大阪市北区 中之島1-1-26
 建築主：大阪市
 設計者：大阪市都市整備局営繕部 株式会社日建設
 施工者：住友建設株式会社 (現・三井住友建設株式会社)
 竣工：昭和57年9月15日
 敷地面積：3,232㎡
 建築面積：1,136㎡
 延床面積：2,498㎡
 階数：地下1階 地上2階 塔屋1階
 構造：鉄筋コンクリート造、鉄骨鉄筋コンクリート造



2階ラウンジより階段室を見下ろす。階段は緩やかで、外には「バラの小径」の樹々と堂島川の水面が見え、建物に美しい中之島の風景を取り込んでいる。(※)

という。伊藤氏は設計者に「美術品のための美術館をつくること」を強く要望した。「理想的な状態で陶磁器を見てもらいたい。それには自然光の下で、青磁や白磁の本来の色合いを見てもらうことが望ましい」。このような伊藤氏の熱い思いが、美術館の設計に反映されている。

敷地は周辺の環境こそ良かったが、東西に長く、またうっそうとした樹木の中を防潮堤が横断し、とても建物が建つ場所とは思えなかったという。そこでまず防潮堤をできる限り堂島川の上手に移し敷地を確保した。また地盤改良のためRC杭を数多く打った。さらに

コレクションを水害の危険から守るため、一階を防潮堤より高くし、展示室は全て二階に設けた。地震に関しても極めて慎重に検討が進められ、通常の1.5倍の強度となるように構造計算がなされている。

本物の色合いを見てもらいたい

こうして一九八一年六月着工した。工期は一六カ月である。特に内部展示室の仕上げ工事に長い時間がかけられた。展示室は、コレクションがひとつの統一体として展示できるように全て二階に設けられた。二階平面は、六つの展示室を展示ロビーで取り囲むように配置し、第一から第三に韓国陶磁、

第四から第六に中国陶磁を配し、歴史的流れと技法的分類に沿って鑑賞できるようにした。天井高や照明効果も展示室毎に変え、展示品の性格の違いを表現すると共に空間にリズムを与えた。また展示

ケースは細かく分節し、一つ一つの陶磁器が最も美しく見えるよう調整できるようにした。前面から展示品を出し入れできるように、前面のガラスが全て両脇壁に引き込まれる仕組みとなっている。このことで展示品の位置を鑑賞者の

第6展示室。展示ケースのガラスは両脇の壁に引き込むことができ、前面から陶磁器の位置を調整することができる。(※)



地下1階部分の施工風景。現場は常に張り詰めた空気であった。奥には中央公会堂が見える。

視点から微調整でき「1ミリの単位でディスプレイ」が可能になったと伊藤氏は語る。

そして最もこだわったのは、第五展示室の「自然採光による展示ケース」である。ここには国宝および重要文化財の青磁などが展示されている。これらは自然光の下で見ると一番美しい。トップライトから光を導き、反射率の極めて高い素材でつくったダクト(光筒)によって展示物を照らす。それを前面の無反射白板ガラスを通して観る。ダクトの中には、曇天時・雨天時に一定基準の光量を下回ったとき自動的に人工照明に切り替わる人工照明ボックスと、透

建築主より 美しいものを 美しく見せる



大阪市立東洋陶磁美術館 名誉館長
伊藤郁太郎 Kenjiro Ito

当初、私が最重要項目として設計者にお伝えしたのは、「美術館の主人公は建築ではなく、美術品そのものである」ということでした。多くの美術館が建築家自身の作品制作の意図を重視するあまり、肝心の美術品が本来の美を感じさせる場を失い、犠牲になっているように感じたからです。美術館の設計は、建築の知識を持つ建築家と展示の知識を持つ美術専門家の両者が緊密な連携をとった上で、共同して行なわなければなりません。私も設計者と何度も議論

を闘わせました。その結果、この美術館は建築が主張せず、快適で落ち着いた環境の中で美的体験をより深く享受できる理想的な建物になったと考えています。

美術館の最も素朴で根源的な役割は、やはり優れた美術品をよりよく観得できる場を提供することです。当館は、東洋陶磁全般に研究調査を進める一方、東洋陶磁の美の神髄を味わい感動することの喜びを提供しうることを念頭にしておられます。それが豊かな人間性の啓発と新しい文化の創造をもたらすと確信しているからです。特に「自然採光展示ケース」はその象徴です。「自然のうつろい」の中で陶磁器を鑑賞することは、日本の美意識の伝統の中で一期一会の精神を再現することでもあります。「美しいものを美しく見せる」。美術館存立の原点に立った建物で、本物の陶磁器をご覧いただきたいと思っています。

設計者より

共感が生む コラボレーション



元株式会社日建設計
横川隆一 Ryuzhi Yokogawa

この美術館の設計には、旧安宅産業時代からコレクションの収集に深く関わってこられた伊藤名誉館長が大きく関わっています。伊藤氏との設計初期段階からのコラボレーションによって、これまでにない稀有の「美術館」が実現しました。私にとってすばらしい出会いでした。

設計者には選ばれ、「安宅コレクション」が保管されていた住友銀行を訪れて最初に伊藤氏にお目にかかった時「これから金庫から陶磁器を持って屋上に行くから来な

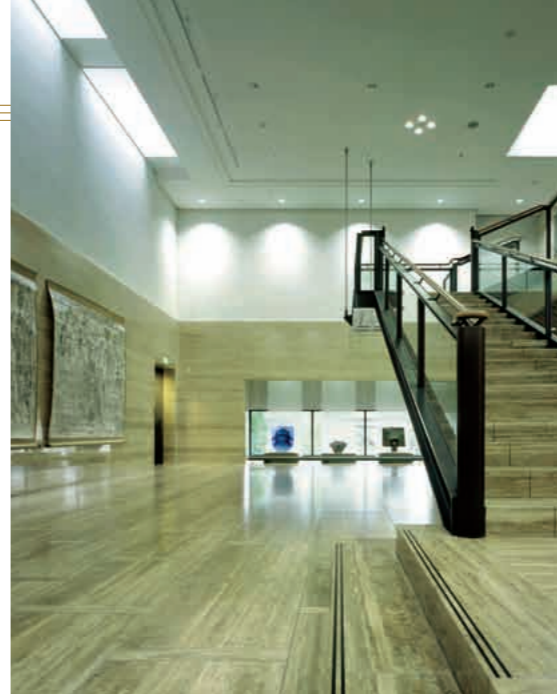
さい」と言われ、ついでにきました。そこで初めて陶磁器を自然光で見たのです。それが本当に美しくかった。だから自然光なのだとかから納得し、どんなに困難が伴っても世界初の「自然採光展示ケース」にチャレンジしようと思ったのです。耐震・耐火・耐水を前提に、展示ケースの平面配置や鑑賞者の動線、ケースのガラスや展示台の高さ、ケースの奥行き、照明の当て方など、実物大模型も含めて数限りない試行錯誤を繰り返しました。特に自然採光展示ケースはそれこそ失敗の連続でした。

しかし、そこには建築主と設計者、そして施工者との幸せな共感がありました。よいものを創ろうというものづくりの精神です。陶磁器には東洋の心が込められています。この東洋の美の遺産を、この極めて堅牢につくられた美術館がこれからも永く守り続けてくれることを祈っています。

明の落下防止板が仕込まれている。このような装置は世界に例がなく、数多くの模型実験によって検証され実現したものである。現場では試行錯誤の連続だった。



現館長の出川哲朗氏。専門は中国陶磁史。「本館は一級品の東洋陶磁器を鑑賞する“大人の美術館”です。来年4月からはLED照明に替わります。新しい色を見て頂けたらと思います」と述べる。



東側に増築されたロビー。一九九九年の増築時、敷地の制約から東側展示室部分は三階建てとなった。しかし当初のコンセプトは明確に貫かれており、増築部と既存部は完全に一体化している。(※)

受け継がれる美的体験の場

このような格闘の末に、一九八二年十月に竣工式を迎えた。この美術館は終始一貫して「美しいものを美しく見せる」という伊藤氏の思いのもと、建築主・設計者・施工者のみごとなコラボレーションによって実現した。その結果、建物は、個人の作家性・匿名性を超えて広く芸術文化を示す〈品格〉をもつものとなった。さらに一九九九年に東側展示室の増築が行われているが、その際も当初のコンセプトが貫かれて、既存部と一体化されている。現館長の出川哲朗氏は、「回転式展示台や免震展示台など展示設備にも様々な工夫を凝らしています。東洋陶磁の質の高いコレクションを通じて、美的体験の場を提供し、今後豊かな感性の育成と教養の向上に貢献していきます」と語る。

自然の移ろいを捉える一期一会の日本的美意識は、陶磁器を通してこの気品高く極めて堅牢につくられた美術館によってしっかりと守られ受け継がれていく。

施工者より

「基本」に心を込める



元住友建設株式会社
吉田康夫 Yasuo Yoshida

当時は所長の川端のもと、六人ほどの体制で工事に臨んでいました。私は当時三十二歳で現場を担当する次席でした。十八歳で住友建設に入社し、十四年目に担当したビックプロジェクトでした。住友の名に恥じない仕事をという使命感と、国宝を含む自宅コレクションを収蔵する歴史的なプロジェクトに携われることで、大変、身の引き締まる思いでした。工事も数多くの方が見学に見えて、現場には常に緊張感がありました。そのような現場で私が一番記憶

に残っているのは外壁のタイル工事です。タイルが大型で特殊なので、どのように貼るか、どうしたら短時間で確実に貼れるのか、その貼り付け方法に試行錯誤しました。特にこの大きさのタイルが剥落しては大変危険なので、落下防止策にも注意を払いました。RC躯体の表面にステンレス棒を三〇〇ミ間隔で縦に取り付け、その棒にステンレス線でタイルを一枚一枚くくりつけました。大変手間のかかる作業でしたが、建物の施工精度・品質には自信を持っています。やはり建築は現場にその本質があると思います。現場第一。私にとってこの現場での経験は、その後の建築指針を決めるほど重要なものでした。良いコンクリートが打てれば必ず良い建物になります。若い人達にはもっと現場に出て、目的意識をもっていろいろなことを体で感じとって欲しいと思います。